かたりべ 38

豊島区立郷土資料館だより

叺(かます)2つと米俵1つに100年の高木家の祈りが込められている。

御札には「武州御嶽山」「富士浅間神社」「三峯神社」等があった。木製、紙製と様々。

発見！ 屋根裏にお宝発見!!

昨年4月、南長崎の高木さんの家を訪ねました。顔が写るほどに磨きこまれた「あがり框(かまち)」や一辺が40cmはある「大黒柱」が目に留まりました。建築後、100年は経っています。

この母屋が取り壊されることを知り、文化財係では、記録（実測図面の作成）をしました。間取りが田の字型をしていることや土間であった部分を改造して板の間にしていたこと等もわかりました。調査では建物のあらゆる所を記録します。進めていくうち天井の方が気になり、早速梯子をかけ、天井板をずらし、懐中電灯を照らして屋根裏を覗き込むと、頑丈に組まれた柱や梁の間に……探していたものがありました！ありました！それが写真のものです。

ところで、神社仏閣からもらい受けた御札を貯め、それらを俵等に詰めて屋根裏や棟束（むなづか）にくくりつけておくという習慣が全国的にみられます。それは、古い御札が千枚になると火伏の力があるとか悪霊が家に入ってこないという言い伝えによるものです。

郷土資料館では本年六月、これらの寄贈を受け、地域の歴史を知るための資料として調査することとしました。日々の生活で人々は何を祈り、現世をどのように生きていこうとしたのでしょうか。調査結果をご期待ください。（福岡）

特集　新館設立に向けてXII　博物館の仕事ってナニ？(6)

フィールドワークのすすめ

一九八四年の開館当初から、複合施設としての制約を余儀なくされた当館では、博物館の活動の場を館内にとどめるのではなく「地域」にもとめていこうという認識から、「そとに出る博物館」を提唱し、年一回フィールドワークを主体とした連続講座を開催しています。

ここでは、これまでに行なったフィールドワーク講座の概要を紹介し、一九九二・九三年度にわたって実施した講座「区境を歩く」を例に、その内容ついて報告したいと思います。

Iフィールドワークの概要

フィールドワークとは、「野外あるいは実験室外の作業・仕事・研究。現場または現地での探訪・採集」(広辞苑)をいいます。当館ではフィールドワークは、住民とともに地域を様々な視点で見直すことで、地域の歴史を見る目を養うとともに、地域の課題を見出し、考えていく機会を提供するものであると考えています。

(1)地域再発見の場として

これまでに当館が実施したフィールドワークには大きく二つのタイプがあります。一つは、地域にかつて存在した、あるいは現在もその面影を残している城郭跡・川・用水・石造物・街道・境などを資料や地図を頼りに実際に歩くもので、地域の景観や人々の暮らしの急激な変貌を現在との比較から認識したり、地域の埋もれた歴史を発見したりという、いわば「地域の再発見」の機会を提供するフィールドワークです。

これまでに開催したテーマとしては、「中世城郭を歩いてみよう」「豊島の庚申塔を訪ねて」「中世鎌倉街道を調べる」「失われた水辺を探る―弦巻川・谷端川を歩こう―」「水辺探索フィールドワーク―千川上水を歩いて・見て・記録する―」「区境を歩く」などがあります。

(2)戦争を考える場として

もう一つは、これまで五回開催してきた「戦争と平和を考える」特別展（豊島の集団学童疎開と戦中・戦後の区民生活）を引き継ぐ形で、一九九一年度から始めた「戦争体験継承講座」です。この講座は、講演や展示解説、国策映画の上映とあわせて、東京都内および近郊の戦災地や戦跡、地下軍需工場跡などの見学を行なうもので、毎年夏休みに開催しています。戦後半世紀を経た現在、戦争を知らない世代が多くなっていくなかで、「戦争」を後世に語り伝え、平和について考える機会を提供する〝かたりべ〟の役目を担うのが、この講座であるといえます。

千川上水のマンホールのふたを囲んで

IIフィールドワークの心構え

以上のフィールドワーク講座にほぼ共通していることは、①地域を区内に限定せず、自治体の枠を越えた近隣地域をも調査対象としていること。②路上での調査に支障がなく、かつ事故防止のために少人数制（二〇名以内）としていること。③実施前にオリエンテーションを行な

い、地図を作成したり資料を解読して予備知識を頭に入れ、調査目的を明確にすること。④講座の最後には座談会を設けて全体のまとめと意見交換を行ない、成果を今後の事業に活かすようにすることです。

テーマによってフィールドワークの内容や方法は当然異なりますが、この四点については主催者側がいつも心掛けていることです。

Ⅲ「区境を歩く」を例に

(1)講座を開くまで

次に、「区境」のフィールドワークを例にその内容をご紹介しましょう。本講座を企画したきっかけは、千川上水を歩いた際に参加者との雑談のなかで出た「今度は区境を歩いてみたいね」という一言でした。これは面白い！と早速その話に飛びついたわけです。実は、こうした参加者との雑談の中から面白いアイデアやヒントを得ることがよくあるのです。

さっそく企画を立てましたが、小さいと思っていた豊島区もその周囲は約二六キロもあるため、コースを四つに区切って一コース（約六・五キロ）ごとにオリエンテーションを事前に設ける形で、①高田・雑司が谷編、②駒込・巣鴨編、③旧西巣鴨町編、④旧長崎町編の計八回の連続講座としました。

区境といっても目にみえるものではなく、しかも行政（区）が決めた境界線ですから、地域の境がどのような意味を持ち、どのような変遷を辿ってきたのかを過去に遡って見ていく必要があります。そこで豊島区地域の地理的特徴に詳しい立教高校の清水靖夫教諭に講師をお願いして打合せを重ねた末、開催時期を一九九三年三月（四回）と五月（四回）とし、健脚を誇る老若男女二〇名の参加者を募集しました。

(2)オリエンテーション

まず、清水先生より地図の読み方についての講習を受け、昭和七年に区が誕生した経緯と区域の変遷を聞いた後、明治一三年と一四年の迅速測図、明治・大正・昭和期の各種地形図、最新版一万分一地形図を使って、色鉛筆で郡・町・村の境や川・田畑を着色する作業を各自行ない、時代とともに境がどのように変遷し、現在の区境となったのかを確認しました。これがなかなか根気のいる作業で、特に文京区との境は複雑に入り組んでおり、地図から判断するのが難しい場所も多くありました。また新宿区との境である神田川も、現在は護岸工事により昔の面影を偲ぶことは困難となっていますが、区境を見ればかつての蛇行の様子が一目でわかり、区境は探れば探るほど興味はつきません。

地図とにらめっこする参加者たち

こうして予備知識を頭に入れたあと、いざ出発！と相なりました。

(3)区境をあるく

片手に地図をもち、史跡に立ち寄ったり、先生の話を聞いたり、メモを取ったりの一コース約三時間の探索は、計四回行なわれ、激しい雨の降る中をびしょ濡れになって歩くこともありましたが、まさに発見と驚きの連続でした。

参加者の中には、すでに自分で区境を歩いたことのある情報通の人、行く先々でマンホールの蓋を調べている人、電柱の上のプレートに昔の字名が書かれてあるのを見つけながら歩く人、写真を撮るのに夢中になる人など、各人が思い思いの興味・関心をもって区境を探索し、逆に学芸員が教えを受けることも多くありました。

しかし、区境をその通り歩くことは、実は不可能に近いのです。区境が川の場合は仕方がないとしても、住宅の中を区境が通っている箇所がかなりあるのです。

さすがにこの時は迂回しましたが、区境の多

くは地域の古い境界を無視して行政側が便宜上引いた境界ですから、不可解な事例が出てくるのも当然なのかも知れません。その後調べてみると、区境が通っている住宅は、玄関がある側の区に住民登録をしているということです。

ビルの壁に埋めこまれた
戸田平橋・戸塚新道記念碑
（新宿区高田馬場2-15）

(4)参加者の声から

フィールドワークを終えた後は、参加者全員で意見交換と反省会を行ないました。参加者の年齢層は三〇代から七〇代までと幅広かったのですが、無事区境を歩き通すことができました。

最後に皆さんに書いていただいたアンケートを一部ご紹介しましょう。

★境の風景をお話と実地探査で企画されたことはすばらしいと思います。常日頃気がつかない細い道、河道跡など変貌の著しいことを古い地図を重ね合わせて驚きを感じました。〔60代・男性〕

★思った以上に旧い道が残っていました。明治の地図を見ながら歩く楽しみを知りました。〔40代・女性〕

★町づくりは住む人がその土地にいかに関わって生活しているかということが大変重要だと思う。その意味からも現区境を歩く試みは、過去の地形と当時の町（村）のかかわりをも顧みることになりとても興味深かった。できることなら小学生又は中学生位の年代の人に体験してもらうと良い結果になると思う。〔30代・男性〕

Ⅳ成果を記録に

フィールドワークは、学芸員が地域を知る恰好の機会であることはいうまでもありませんが、参加者の意識変化と参加者同士の交流がなんといっても一番の収穫ではないかと考えています。

地域の再発見を通して、参加者の地域の景観保存や文化財保護への関心が高まるとともに、資料館と参加者（住民）とのネットワークづくりのきっかけともなっているといえます。

今後は、ただ歩くだけでなく、もう少し時間をかけながら、参加者全員で歩いた時の情報を記録して冊子にし、参加できなかった人たちにも活用できる工夫が必要だと考えています。

今後の参考にするためにも、フィールドワークに関する要望・意見などをお寄せください。

皆さんも一緒にまちを探索してみませんか。

（横山）

郷土資料館なんでもQ&A

Q 昭和のはじめ頃、豊島区内にも、まだ麦畑があったそうですね。先日、テレビで多摩地域の「麦打ち唄」を聞きましたが、区内でも歌われていたのでしょうか。

A 麦は6月から7月にかけて収穫されますが、刈り取った後に麦打ちという作業を行ないます。穀類や豆類を脱穀するクルリボウという道具で、麦のノゲ（芒：のぎの訛）をとりますが、昼間の暑い時に近所の人同士が互いに助けあってする労力のいる作業です。庭に敷いた筵（むしろ）の上に麦を並べ、その両側にクルリボウ持った人が5人位ずつ向かい合い、交互にクルリボウをおろして麦を叩くのです。

次にあげるのは、長崎で歌われていた歌詞の一例です。

「テンキャヨーイヒヨリハツーヅクヒトナルコロー（天気は良い、日和が続く日となる頃）」と、ひとりが出だしに歌います。すると、**「アードッコイ、ドッコイ、ノゲッポイ、ノゲッポイ」**とみんなが囃します。そして、その後に次の人が別の歌詞を続けます。

このように、炎天下での作業のリズムを、歌いながら整えていたようです。（福岡）

敗戦・終戦五〇周年記念特別展

「戦争と豊島区」開催迫る！

豊島区立郷土資料館では、開館以来これまで三回の「戦中戦後の区民生活」という特別展と豊島区の集団学童疎開に関する特別展を二回開催してきました。また、一九九〇年からは「戦争体験継承講座」として戦跡見学会などを交えた講座を毎年開催してきました。そのためもあって、これまでに区民の方々から数多くの戦争関連資料の提供を受けております。

そして、今年はアジア太平洋戦争が終結して五〇年目にあたります。そこで、当館でも「戦争と豊島区」と題してこれまでに収集された戦争に関する資料を一堂に集めた特別展を開催します。

現在、急ピッチでその準備を進めている最中ですが、その過程でもいろいろな新しい資料を収集することができました。

たとえば、写真の天井板です。この左側にあいている穴は一九四五年四月一三日の空襲で投下された焼夷弾によるものです。この資料をご提供いただいた方が家を建て替えるとのことでしたので、家の取壊し工事の直前に採集することができました。このほかに、同日の空襲直後の巣鴨を撮影した大変貴重な写真も今回発見されました。

また、アメリカ軍の飛行機によって撒かれた「伝単」と呼ばれるビラや、ポツダム宣言受諾・降伏に反対する勢力によって一九四五年八月一五日に撒かれたと推定されるビラも展示する予定です。

豊島区内に残る数少ない被災品のひとつ（豊島区目白で採集）

それから、これまで散発的にしか展示する機会のなかった、戦地から家族へ送った兵士の手紙も今回数多く展示する予定です。豊島区からも多くの人々が中国大陸・南洋諸島・南方へと出征していきました。そのような兵士たちの足跡を辿りながら、戦争が兵士や家族、そして戦場となった国々に住む人々に何をもたらしたのか、考えていこうと思います。

その他、豊島区の集団学童疎開に関する研究の進展についても展示の中で紹介していく予定です。

これら、豊島区に残された数々の資料を通して、今から五〇年前に終結した戦争を〝被災〟の側面からだけではなく、前線と銃後の区別がなくなり総力戦となった〝近代戦争〟そのものとして考える機会としたいと思います。

なお、展示期間中には講演会（八月六日）・公開座談会（八月二七日）・映画上映会・（九月一七日）・戦争遺跡見学会（日程未定）などの開催も予定しておりますので、多くの皆さんの参加・来館をお待ちしております。

★会期：**一九九五年七月二九日（日）から一〇月一日（日）まで。**なお詳細については、『広報としま』・ポスター・リーフレットなどをご覧下さい。

（伊藤）

連載　一点の資料から《その12》

内国勧業博覧会のメダル

昨今、東京都の世界都市博覧会の中止をめぐって議論が沸いていますが、そもそも日本における博覧会の歴史は、殖産興業政策の一環として、明治政府が明治一〇（一八七七）年に開催した第一回内国勧業博覧会に始まります。

以後明治一四年・二三年・二八年・三六年と計五回開催され、第三回までは東京上野公園、第四回は京都、第五回は大阪が会場となりました。第五回博覧会には、一五三日の会期で出品物二七万七千点、入場者四三五万人を数え、博覧会はまさしく当時の国民的大イベントでした。

この博覧会の目的は、全国各地から特産物や製造品を一堂に集めて知識や見聞を広めるとともに、それらを比較研究することによって、国内産業の育成と欧米の近代技術の導入、そして貿易の振興をはかることにありました。

勧業博覧会には豊島区地域からも数多くの出品がありましたが、その中でも江戸時代より一大園芸センターとして知られた駒込・巣鴨の園芸植物は質量ともに群を抜いたものでした。

博覧会に出品した駒込・巣鴨の植木屋は、東京が会場となった第一回から第三回までに二九名を数え、このうち三回とも参加したのは、駒込染井の伊藤金五郎・伊藤重兵衛・伊藤小右衛門、駒込伝中の高木喜兵衛、巣鴨二丁目の内山長太郎・内山卯之吉の六名で、いずれも明治期の園芸界を代表する植木屋たちでした。出品された植物は、松・柏・椿・楓・竹・躑躅・山茶・蘇鉄・百合・蘭・石菖・桜草など多種多様で、その形態も地植・鉢植・盆栽・苗・種など多岐にわたり、当時の植木屋の園芸技術の水準の高さをうかがい知ることができます。

ここに紹介した銅メダル（伊藤善明氏所蔵）は、伊藤重兵衛（四代目）が、第二回博覧会に寄植松、棕竹、縮緬柏、桧葉など四八点を出品した際にもらったもので、表に「有功」の文字と菊と桐の紋章が、裏に「明治十四年内国勧業博覧会」の文字が浮彫りされています。

有功賞牌（表） 直径6.6cm

この時の『審査評語』には「小石積ノ小潅木積年ノ培養ニ因リ繁茂四垂ス一奇品ト称スベシ、又柏類三十五盆異品珍種亦尠カラズ、其他諸木ヲ陳列スル注意厚シ其有功嘉スヘシ」とあり、褒賞は「有功賞牌三等」でした。

ところが、メダルが納められている漆塗りの木箱の蓋には「二等賞牌」と金文字で書かれており、『評語』とは等級が違っています。当時の賞状は現存しておらず、また伊藤家でも事情を知る人はすでに亡くなっています。

そこで、他回の出品について調べたところ、第一回には赤松（石付鉢植）・柊（覆輪）・初雪桂・鳳凰杉・大明竹が出品され、褒賞は「花紋賞牌」でした。また第三回には桜草六〇点・山茶花一五点・赤松・羊歯が出品され、「褒状」の受賞でした。したがって、漆塗りの箱は第二回博覧会に使われたもので、褒賞は「有功賞牌二等」の可能性が高いことが推察されます。

四代目伊藤重兵衛は、勧業博覧会のほか、各種共進会や東京勧業博覧会（明治四〇年）などにも意欲的に出品し、また『椿花集』や『桜草銘鑑』などを著して、明治期の園芸界の発展に多大な貢献を果たしました。その多才ぶりは、伊藤善康氏より当館に寄贈された伊藤重兵衛関係資料からも窺い知ることができます。（横山）

新連載　豊島をさぐる《その1》　雑司が谷の楠木正成伝説をさぐる

新連載「豊島をさぐる」は、豊島区内のあんなこと・こんなことに興味を持って、さぐってみようというものです。第一回は、雑司が谷に伝わる謎の伝説をさぐります。

雑司が谷法明寺の墓地に、楠木正成（まさしげ）の娘の墓（姫塚）といわれるものがあります。墓石の表面には、「楠正成公息女之墓」とあります。楠木正成は、南北朝時代に後醍醐天皇の忠臣として活躍した人物です。そのため、戦前の教育でもてはやされました。最初はこの墓も近代になって作られたものかと思われましたが、江戸時代末の天保九（一八三八）年に中沢氏が建立したものであることがわかりました。しかし、中沢氏という人物についてや、またなぜこの墓が立てられたのかということもわかりません。

そこでいろいろと史料をあたってみたところ、雑司が谷には江戸時代から楠木正成に関する伝説があることがわかりました。江戸時代の中期、正徳から享保にかけて編纂された図解入り百科事典である『和漢三才図会（わかんさんさいずえ）』の法明寺の項には、「曹司谷に在り。法華。開基日源上人。鬼子母神の社有り。古松樹有り。伝へて云ふ、楠正成、関東に向ふ時此に寓し、植える所なり。」とあります。楠木正成が、関東に来た時に松を植えたというのです。正成が関東に来たという事実はありませんが、江戸時代のかなり早い時期から、正成と法明寺との関係が伝説になっていたことが知られてます。

また、天保七（一八三六）年に刊行された『江戸名所図会』には、「楠正行（まさつら）の息女は妙典入道某の室にて、その頃夫婦ともに大願ありて当寺の檀越となり、応永十二年乙酉の年再びこの影像に彩色を加へたりと云ひ伝ふ。」とあります。楠木正行は正成の子供で、正成の死後も南朝方として活躍します。その娘と夫が法明寺の旦那となり、応永一二（一四〇五）年に木像に彩色を加えたとしています。これと同様のことが、法明寺略縁起にも述べられています。

この木像は日蓮の像で、戦前まで法明寺にありましたが、残念ながら空襲で焼失してしまいました。雑司が谷の地誌である『新編若葉の梢』には、その像に胎内にあった銘が引用されています。それによると「別当大蔵郷、日蔵、法明寺御影、応永一二年乙酉三月六日、造立大旦那妙典同妻女楠女、仏諸品川常慶」とあり、確かに妙典という人物とその妻の楠女が、木像の彩色をしたことがわかります。

この楠女が、本当に楠木姓かどうかが問題になります。中世の女性は、実家の姓を名乗り藤原女や橘女などというように史料に現れます。とするならば、この楠女が楠木姓である可能性はあります。楠木正行は関東に来たことはありませんが、関東に下向して足利尊氏方と戦った楠木姓の人物として楠木正家という人物がいます。正成の弟といわれ、延元元（一三三六）年から常陸国瓜連城（茨城県瓜連町）で佐竹氏と激戦を繰り返しました。この楠木正家と楠女に関係がある可能性も残されていますが、残念ながら確証はありません。

雑司が谷の楠木伝説については、法明寺の日蓮像の彩色をした楠女という女性が、楠木正成や正行と関係があるとして江戸時代の書物に記載され、その記述をもとにして楠女の墓が立てられたものと考えられます。雑司が谷という地名も、南北朝時代に朝廷の雑士が移住したことからついた、という伝承も残されていて、いろいろと興味深い地域です。

（小林）

豊島区立郷土資料館からのお知らせ

◆歴史講座（連続）のお知らせ

『豊島氏編年史料Ⅱ』を読む（全四回）

本年三月に刊行された『豊島氏編年史料Ⅱ』をテキストにして、豊島氏研究会の先生方を講師に迎え、各地の豊島氏の活躍を追うとともに、武蔵豊島氏との関係を考えていきます。

○第一回　7月2日（日）午後2時～4時
演題　戦国時代の下総豊島氏
講師　桜井　彦氏（宮内庁書陵部）

○第二回　7月9日（日）午後2時～4時
演題　足利長尾氏家臣豊島氏の活躍
講師　稲葉継陽氏（立教大学大学院）

○第三回　7月16日（日）午後2時～4時
演題　奥州豊島氏を追って
講師　海津一朗氏（文京ふるさと歴史館）

○第四回　7月23日（日）午後2時～4時
演題　四国豊島氏と毛利水軍豊島氏
講師　小林一岳氏（立教大学講師）

〔会場〕勤労福祉会館四階会議室
〔定員〕五〇名

参加申込みは、六月二〇日で締切となりましたが、残念ながら抽選にもれた方や今回参加を申し込めなかった方は、郷土資料館でテキストを購入することができます（一冊一二〇〇円）。

◆臨時休館のお知らせ

特別展の準備のため、七月二一日（金）から二八日（金）まで臨時休館となります。特別展は七月二九（土）にオープンします！。

編集後記

本格的な梅雨の季節となりました。今年度第一回の「かたりべ」38号をおとどけします。

今年四月から**雑司が谷旧宣教師館**（雑司が谷1－25－5☎3985－4081）が、郷土資料館の仲間入りをしました。

旧宣教師館は明治四〇（一九〇七）年に米国宣教師マッケーレブが自らの居宅として建てたもので、豊島区内に現存する最古の近代木造洋風建築として、区の文化財に指定されています。

昭和五七（一九八二）年に区が取得して以来、建物調査・保存修理工事を経て、平成元（一九八九）年から館内に関連資料を展示し、一般公開しています。現在、資料館の「分館」としてどのような活動を行なうべきかを検討中です。

また、「かたりべ」も装いを新たに、今号から新企画「豊島をさぐる」と四コマ漫画の連載を初めました。ますます充実した館だよりとなるよう、職員一同はりきってがんばります。（Y）

かたりべ
・
No.38
・
1995年6月30日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03－3980－2351

豊島区広報印刷物L30-07-073
本紙は再生紙を使用しています